在外研究報告

スタンフォードの仏教研究とその周辺

石　井　清　純

駒澤大学西暦2000年度公費在外研究

研究期間：自2000年4月1日、至2001年3月31日。
(2000年3月27日出国。2001年3月27日帰国)

研究機関：スタンフォード大学仏教研究所（Stanford Center for Buddhist Studies)

所 在 地：アメリカ合衆国カリフォルニア州スタンフォード
Building 70, Room 71E, Main-Quad Stanford University
Stanford, California 94305-2165（Phone/Fax：+1-650-724-5180)

研究課題：アメリカにおける道元研究の動向と批判仏教の影響に関する研究

西暦2000年度、筆者は上記のごとくに駒澤大学公費在外研究の機会を与えられた。ここに、北米カリフォルニアにおいて行った研究活動の概要を報告する。

研究にあたり、基本的に上のような課題を提出したが、在外研究の地に北アメリカを選択した理由は、まず第一に、欧米における禅研究が、現在如何なる状況にあるのか、そしてそれが、日本と比較して、どのような傾向を有しているのかということを実地に見聞することにあった。さらに個人的に知りたかったのは、仏教教育の方法についてである。なぜかといえば、仏教的伝統のない北アメリカにおいて、それを理解させるためにどのような手段がこうじられているか、これに非常に興味を感じていたのである。

その意味で、アメリカに限らず非仏教国の教育機関での研究を考えていたのであるが、その中で、スタンフォード大学を選択したのは、そこにカール・ビールフェルト（Carl Bielefeldt）博士およびベルナール・フォール（Bernard Foure）博士が教員として在籍していたことによる。お二人は、共に欧米圏屈指の日本仏教研究者として知られるが、本学の石井修道博士が大変懇意にされていたこ

とから、ご紹介をいただくことができた。さらに幸運なことに、詳しくは後述するが、スタンフォードでは1997年に設立された仏教研究所において客員研究員の制度が発足していた。所長のカール博士に在外研究を申し入れたとき、博士は即座にその枠を適用してくださったのである。

まさに、多くの縁をいただいて今回の在外研究先は決定した。

当該機関においては、研究室の貸与を受けることができた。そのうえ、多くの講義への自由な参加を許され、また自分自身でも、博士課程の学生を対象に日本仏教の講義を持たせてもらえるなど、自身の研究目的に合致した活動を、極めて自由で恵まれた環境下において行なわせていただくことができた。

さらに、個人的な活動としては、大学というアカデミックな空間に留まらず、曹洞宗寺院や開教センター、禅センターなど、現地の教化・布教機関との交流も持つことができた。そこで開催される多くの行事に参加させていただくことにより、北米における「禅」の社会的受容形態や実践形態を垣間見ることができたのは、当初の期待をはるかに上回る成果であったと言えよう。

このような、極めて有意義な期間を過すことができたのも、カリキュラムの負担を追いつつ在外研究をご快諾下さった学部教授会および、受け入れをご快諾くださったスタンフォード仏教研究所各位のご厚情によるものに他ならない。具体的報告に入る前に、まずここで誌面を借りて深謝の意を表させていただくこととしたい。

さて、以下に、在外研究期間中に研究・視察したところの、スタンフォード大学における仏教研究・および仏教教育について、それから曹洞宗を中心としたシリコンバレー・ベイエリアの禅センターについて、見聞したことのあらましを報告することにする。

Stanford Center for Buddhist Studies （SCBS）
スタンフォード大学仏教研究所

まず最初に、私が客員研究員として所属していたStanford Center for Buddhist Studies（以下SCBS）の組織・性格およびその活動について触れておくことにする。

この研究所は、1997年にスタンフォード大学人文科学研究科のCenter for East Asian Studies（東亜研究所）の一部局として設立された比較的新しい研究

所である。研究所の各施設は大学の70番ビルディング、宗教学科の中に位置している。

スタッフや活動内容については、オフィシャルのホームページ（URL http://www.stanford.edu/group/scbs/）に詳しい。本来は、在外研究期間中の内容を紹介するべきかとも思うが、新しい研究所ゆえ、年度毎の内容の変更が大きいことを鑑み、いまここでは、2001年7月19日更新の内容に基づき、それを抜粋しながら、少し補足する形で紹介をしておくことにする。

所長（director）は、カール・ビュールフェルト博士（宗教学科主任教授）とベルナール・フォール博士（宗教学科教授）の2人である。

また、活動の調整役として副所長（assistant director）に、アジア言語学科の大学院生のウェンディ・アブラハム（Wendy Abraham）氏が本年7月より就任した。この3名が実質上の運営委員会を構成している。

その他、アドバイサリー・スタッフとして宗教学科の助教授ルディー・バスト（Ruddy Bust）氏、比較文学のトマス・ヘアー（Thomas Hare）、ホーン・ソージー（Haun Saussy）の両氏、アジア言語・美術のメリンダ・タケウチ（Melinda Takeuchi）氏および美術専攻のリチャード・ヴィノグラッド（Richard Vinograd）氏が名を連ねている。

設備は、先に述べた70番ビルに事務室・資料室と演習室を備えている。資料室には、3000冊を超える仏教書が整備されている。その多くは、とある東アジア研究者の遺品として寄贈されたもので、その名を取ってミッチェル・ストリックマン文庫（Michel Strickman collection）と呼ばれている。その他、カール・フォール両氏の蔵書も配架されており、『大正新脩大蔵経』・『国訳一切経』などのテキスト類をはじめ、『仏教語大辞典』や『禅学大辞典』などの基本辞書類や『正統道蔵』などが揃っている。

活動

活動は、研究活動および研究支援、学会・講義の開催、その他の3種に大分される。

研究活動

2001-2年度には、以下の4種のプロジェクトが予定されている。

① 仏教関係文献目録の作成（Buddhist Studies Bibliography Project）

② 曹洞宗禅籍の訳注（Soto Zen Text Project）

③ アジア宗教の図像研究（Diagrams in Asian Religions）

④ *Asian Religion and Cultures Series*（叢書）の出版

具体的な活動内容であるが、①は、カール・ベルナール両教授の宗教学科のプロセミナーと連携し、仏教研究における参考資料の作成を行なうものである。

②は、道元研究の専門家であるカール教授および、サラ・ローレンス大学（Sarah Lawrence College）のグリフィス・フォーク（Griffith Foulk）教授を中心とした、曹洞宗関係典籍の英訳と註記のプロジェクトである。両教授は、現在も曹洞宗宗務庁の、宗典英訳プロジェクトの翻訳委員に名を連ねている。私見では、この成果が、このプロジェクトの原型になっているように思われる。その成果に電子テキスト化を念頭に入れた語注や書誌資料の付加がなされ、研究者の参照に資することが意図されているようである。

私も参加させていただいた毎年春学期のカール教授のセミナーは、『正法眼蔵』の講読英訳を行なっているが、これは、このSCBSのプロジェクトの一環としても機能している。

③の図像資料関連は、ベルナール教授が中心となっている。昨年度の春学期のセミナーは、仏教の世界観として、種々の曼荼羅を意識したものであったが、このプロジェクトは、さらにヒンドゥー教や道教にまで範囲を広げ、それらに示される図像の教理的意義や儀礼についてのデータベースを作成しようとするもののようである。

④は、スタンフォード大学出版部（Stanford University Press）との協力の上、カール・ベルナール両氏にグレゴリー・ショーペン（Gregory Shopen）氏（UCLA教授）を加えた3名のエディターの下に、仏教関連研究叢書の出版を目指すものである。

以上の各プロジェクトのうち、2000年度より継続して進行中のものは、私見によれば、②曹洞宗典の英訳のみであった。また、その多くの部分が、純粋に研究所独自の活動というよりも、大学のカリキュラムと連携して行なわれている。これは、スタッフの問題とも関連していようが、一研究所の組織を越えた活動を意図するには有効な運営の仕方と言えよう。いずれにしろ、これらの活動が本格的に開始された（あるいはされる）のが、本学年度からであることは、

この研究所が活動の充実を模索している発展途上の段階にあることを良く示しているといえよう。

研究支援活動

この活動は、個々の研究者に対し、研究所および大学の設備の使用を許可することにより、その研究活動を支援するものである。現時点では基金援助は行なわれていない。

私の在外研究当時（すなわち昨年度）は、詳細な分類規定はなく、客員研究員(Visiting Scholar) の制度のみ存在していたように記憶している。しかし現在では、次のような、種々のスタンスでの研究者の受け入れを行なっている。

① Doctoral Fellows　学位論文執筆中の大学院生への支援。

② Postdoctoral Scholars　学位取得後の若手研究者を対象とした研究支援。SCBSへの所属を認める。

③ Faculty Fellows　スタンフォード教員が学外で研究するに際しての支援。

④ Visiting Fellows　学外研究機関に所属する研究者の、スタンフォードにおける研究の支援。SCBSへ所属。

⑤ Visiting Researchers　他大学大学院生へのスタンフォードにおける研究機会の供与。

⑥ Affiliate Scholars　近隣の研究所の研究者へのSCBSの設備の使用およびプログラムへの参加を認めるポスト。

⑦ Research Assistance　院生研究助手の採用。(研究費支給)

以上の7種を整理すれば、①・③は、スタンフォードに所属している研究者や大学院生への研究支援であり、②・④・⑤・⑥が、学外者へSCBSのポストの供与となる。因みに、私が訪れる以前に橋本英樹氏（本学大学院博士課程満期退学）がVisiting Researcherとして滞在していたが。このカテゴリーからすれば、彼は⑤に属し、私は、最初のVisiting Fellowということになる。

学会・講演会の開催

1999年10月にスタンフォード大学内で開催された「道元禅師シンポジウム(英題：Dogenzen Symposium)」は、曹洞宗宗務庁と、この研究所の共催になるものであった。その後、2000年４月29日（日）には、サンフランシスコ郊外に位置するグリーンガルチ禅センターにおいて、Stanford Continuing Study

Programとの共催による学外シンポジウム「The Buddhist Experience : Facets of a Religion」を開催するなど、種々の学会・シンポジウムを開催している。

その他、ワークショップも開催されている。私の研究期間内では、3月6日より12日までの5日間、札幌大学客員教授のファビオ・ランベリ（Fabio Rambelli）氏による『麗気記』のワークショップ「Texts, Tools, Rituals: Reikiki and the World of Medieval Religion」が開催された。

私は、これらのすべてに参加した。このうち、私の研究期間中に開催された「The Buddhist Experience : Facets of a Religion」の内容は、次節において詳しく紹介することとしたい。

これらの活動について、SCBSのホームページでは、次のような分類がなされている。

① 大学院のカリキュラムと連動した仏教研究討論会（Buddhist Studies Colloquium）の開催。
② 仏教関連ワークショップの開催。
③ 仏教研究カンファレンス開催への資金援助。
④ 大学院生研究集会の開催。
⑤ エヴァンス・ウェンツ・レクチャー（Evans-Wents Lectures and Symposia）と名づけられた定例の公開講演。

さらに、これらのカテゴリーに含まれない不定期の講演会も数多く開催される。2001年3月2日に行なわれた私の最終講演も、不定期の行事である。

講義・演習

この研究所は、正課の科目は設置されていない。ただ、上のワークショップを始め、いくつか、大学院生の個人研究支援のための講座が設けられている。

① Reading Group

学期毎に1コマあるいは2コマ開催される、仏典・禅籍の講読を中心とした非公式の講義。いわゆる自主ゼミである。ただし、参加した大学院生のうち、希望者には、「individual work」として単位が与えられる。

私も依頼を受けて、秋学期と冬学期に、週に1回1時間、『永平広録』の講義を行ない、希望学生に2単位を与えた。

② カリキュラム補助

正課のカリキュラムを支援するための基金。休暇のための教員の代行や、

その他客員教員の招聘、種々の機材の購入などに充てられるもの。

③ 学生支援基金

学科に所属する学生に対し、機器の購入や地方・国外への学会参加の旅費などを支援するもの。本年6月30日より東京大学において開催された印度学仏教学会第50回学術大会にも、この支援によって学生が参加していた。

以上が、在外研究期間中に私が所属していた機関の概要である。基本的にはアジア研究所の付置研究所として仏教関係の行事の運営に当たるものであるが、それと同時に、学部のカリキュラムと連動して仏教関連の講義に対する支援も行なうことが、この研究所の基本作業ということになっている。

Buddhist Community at Stanford （BCAS）

仏教研究所以外にスタンフォード大学の内部で仏教関連の活動している組織として、BCASという学生団体が存在するので、ここに紹介しておくことにする。

この団体は、宗派を問わず仏教に興味を持っている学生が中心となって組織・運営されている学生サークルである。日本的な呼称を用いれば、仏教青年会ということになろう。

主な活動は、坐禅会の開催、メールマガジンの発行、各種講演会・学習会の開催等である。その他、さすがに学生の団体だけあって、休日のリクリエーション旅行なども開催している。

活動はなかなか活発で、坐禅会は月曜から金曜までの毎日1回、朝8:45～9:45、夕5:15～6:15のいずれかの時間に行なわれていた。私は、木曜日夕方の坐禅に毎週参加していたが、人数は少ないながら、宗教学科に留まらず、医学部や教育学部等から多くの学部の学生が参加していた。なお、これとは別にヨーガの集会も開催しているのが、いかにも通宗派的である。

メールマガジンの発行は週に1回。ベイエリアの禅センターや大学で開催されるワークショップなどの催し物の案内を主な内容としている。

講演会・学習会は、学外より僧侶や指導者を招いている。研究者ではなく、実地で活動をしている実践者を中心に、精神生活に関する内容が多く取り上げられている印象であった。

研究活動概要

次に、私の在外研究期間の活動を概観する意味で、出国より帰国までの動静を継時的に示しておくことにする。

【春学期】（2000年3月27日～6月10日）

3月27日　北アメリカ入国。仏教研究センターより研究室の貸与を受け研究を開始。

3月31日より、宗教学科の仏教関連の講義の聴講を開始。

(1) Carl Bielefeldt, Japanese Buddhist Texts（月曜 15:15～18:00）
大学院のプロゼミ。『正法眼蔵』「山水経」の巻の解釈および英訳。
出席している院生の依頼により、準備のための集会に参加し学習を補佐した。

(2) Zen Buddhism（月・水・金曜 13:15～14:05）
学部一般教養（人文科学と世界文化）。禅の発生と展開からアメリカへの伝播までを概説。※講義内容については、次章にて詳説。

＊以下、春学期中に筆者の出席した講演会およびシンポジウム（仏教関連）＊

4月7日　Neil McMullin（University of Tronto）
"Options in an Age of Degenerating Expectations: Genshin's Ojoyoshu and Passed-over Court Bureaucrats"
源信を中心とした叡山浄土念仏と藤原家との関連。「源信の『往生要集』撰述は比叡山教学の範疇を逸脱していなかった」と結論づけていた。

4月11日　Paul Harrison（University of Canterbury; New Zealand）
"Buddhist Visions of Perfection: Interpreting the Earliest Sources of the Sukyavati Tradition"
極楽についての記述を中心とした『無量寿経』の異訳についての書誌学的研究。対象となっていたのは、康僧鎧訳『仏説無量寿経』、支婁迦讖訳『仏説無量清浄平等覚経』、それに支謙訳『阿弥陀経』の三本。それらを、原『無量寿経』から、早い段階で分岐したものとしていた。ただその結論よりも、むしろ最後の質疑応答で、「女人成仏」の問題について、フェミニズムの観点から活発な議論がなされていたのが印象的であった。

4月21日　Dale Wright（Occidental College）
"Impermanence and Historicity in the Buddhist: Thought of Enlightenment"
発表者は禅の専門家であり、今までに東洋の歴史家や宗教史家が語ることから逃げていたものとして、「悟り」あるいは「ニルバーナ」について積極的に定義しようという講演であった。

4月28日　Anne Klein（Rice University）"Easily Deluded, Easily Freed"
チベット仏教を中心に、如来蔵と頓悟との関連についての講演であったように記憶している。

4月29日　スタンフォード仏教研究所（SCBS）主催のシンポジウム。
"The Buddhist Experience: Facets of a Religion"
サウサリート（サンフランシスコ近郊）の蒼龍寺（Green Dragon Temple）にて開催。
※シンポジウムの内容については、次章にて詳説。

5月22日　Elizabeth Napper（Tibetan Nuns Project）
"The Changing Roles of Nuns in Tibetan Society"
講演者は、チベット仏教の尼僧教育プロジェクトに携わっており、政治的な変動下における尼僧たちの運動の変化と現状についてスライドを使用して解説していた。

【夏学期】（6月19日～8月31日）

6月25日～30日
ボディー・マンダ禅センター（Bodhi Manda Zen Center, ニューメキシコ州ヘメス）で開催された第24回サマーセミナー「Exploring Buddhism; Study and Practice」（6/19～30）の第2週目の講師として、4回の講義を行なう。本学の吉津宜英教授も、10回の講義を行なわれた。対象学生は、ニューメキシコ州立大学哲学科の学部生と大学院生、および日本の花園大学宗教学科の学生であった。※ 講義内容は次章にて詳述。
以降は夏季休暇のため、特に参加した行事はない。

【秋学期】（9月6日～12月15日）

9月10日　曹洞宗北アメリカ開教センター主催のワークショップ「Dharma Study Group」に出席。坐禅会と『正法眼蔵』「仏性」の巻講読。

以降、月1回の開催には帰国まで毎月出席。(10/15、11/19、12/17、2001/1/14、2/11)

9月18日　曹洞宗にて嗣法したベイエリアの僧侶達のセミナー（於蒼龍寺）に出席。

講師はウィリアム・ボディフォード（William Bodiford）博士（UCLA教授）。内容は、中国日本の受戒作法の歴史と、近世曹洞宗切紙に見る曹洞宗の受戒作法について。19日も引き続き開催されるも、私は不参加。

9月27日　これより秋学期の講義開始。

(1) Bernard Faure, Japanese Buddhist Seminar（水曜 12:15～2:30）

大学院のプロゼミ。日本仏教関連の専門書を抽出、内容検討を行なうもの。禅関係書籍については、学生の補佐役として問題提起を行なった。

※内容については次章にて詳説。

(2) Gregory Schopen, Introduction to Buddhism（火・木曜 11:00～12:15）

学部一般教養。仏教の興起（釈迦牟尼）から、初期大乗仏教の発生までを概観していた。専門の関係からか、中国・日本仏教には触れず。

10月5日　BCASの坐禅会に参加。以降、毎週木曜日夕刻に出席。

10月9日　講演会　Haruko Wakabayashi（University of Tokyo）

"Reading the Tengu zoshi: Good Tengu, Bad Tengu, and the Two Types of Evil in Late Kamakura Buddhism"

講師はプリンストン大学で学位を取った、東大資料編纂所客員研究員。『天狗草紙』を題材に、天狗の属性に本覚思想的背景のあることを指摘していたが、若干論に無理があるように感じた。

10月13日　SCBS のReading Groupとして、『永平広録』の講読会を開始。

毎週金曜日12:30～14:00。大学院博士候補生のIndependent Study（自主学習）として、卒業単位として2単位を認定（科目コードRS299）。

11月3日　講演会　Jack Kline（University of Michigan）"Charisma and the Sage"

11月19日　桑港寺「Dharma Study Group」および「七五三御祈祷会」随喜。

11月26日・12月2日　好人庵（カリフォルニア州オークランド。秋葉玄吾北アメリカ開教総監開山・現住）の臘八摂心。(講義の関係で初日と最終日のみ参加)

好人庵は日本の宮大工の手によって建立された坐禅堂を持ち、極めて厳粛な攝心がとり行なわれていた。攝心時の基本的な差定は以下のとおり。

時刻（午前）	行事	時刻（午後）	行事
4:00	Wakeup Bell	14:50	Zazen
4:30	Zazen	15:30	Kinhin
5:20	Kinhin	15:40	Zazen
5:30	Zazen	16:20	Kinhin
6:20	Kinhin	16:30	Zazen
6:30	Zazen	17:10	Evening Service
7:20	Morning Service	*	Dinner
*	Breakfast/Samu	18:30	Zazen
10:00	Zazen	19:20	Kinhin
10:40	Kinhin	19:30	Zazen
10:50	Zazen	*	(Fukanzazengi)
11:30	Kinhin	20:20	End
11:40	Zazen		
12:20	Noon Service		
*	Lunch/Break		

12月１日　講演会　Irene Lin（Stanford University）
"Servant Spirits in Child Form: Goho Doji in Medieval Japanese Religions."
12月3日　桑港寺成道会法要に随喜。
12月8日　『永平広録』講読会、秋学期分終了。
12月30日　桑港寺歳末餅つきに参加。
2001年1月１日　好人庵・桑港寺大般若会に随喜。

【冬学期】（2001年1月8日～3月23日）
1月9日　講義開始。
(1) Bernard Faure, Buddhist Studies Seminar（Buddhist Cosmology）
(2)　同　上　、Religion in Japan
※ 講義内容は次章にて詳説
1月19日　秋学期に続き、『永平広録』の講読会を再開。
2月3日　サンフランシスコ禅センターにおける『正法眼蔵』「現成公案」のワークショップに参加。内容は後述。

2月4日　午前中、前日に引き続きワークショップに参加。午後、桑港寺の節分会に随喜。

2月7日　Graduate Theological Union（GTU、宗教学大学院）およびそこに隣接するカリフォルニア州立大学バークレー校見学。案内をしてくれたShannon Hickey氏は、UCバークレー校の職員をしながら、GTUにおいて道元を題材に修士論文を作成中とのことであった。

2月26日　講演会　Hung Wu（The University of Chicago）
"The Birth of Ruins: Inventing a Modern Visual Culture in China"

2月28日　講演会　Toni Huber（Munich University, New Zealand）
"Parinirvana in Assam: The Tibetan Rediscovery of the Site of Buddha's Passing."

3月2日　研究期間満了を控え、講演会を行なう。
"Eihei-ji Monastery System in Dogen's Time and Kenmitsu Buddhism; Reconsidering the Position of Dogen's Monastery in Kamakura New Religions Movement"

邦題は「道元禅師在世中の永平寺僧団と顕密仏教」。発表原稿は、筆者個人のホームページ（http://homepage1.nifty.com/seijun/）にて公開中。

3月4日（日）　桑港寺ひな祭り手伝い。

3月6日～12日　SCBSワークショップ。Fabio Rambelli（Sapporo University）
"Texts, Tools, Rituals: Reikiki and the World of Medieval Religion（Shinto Seminar）"

『麗気記』を題材にした、真言神道の根本思想や儀礼に関するワークショップ。参加者は大学院生。

3月9日　講演会　Tom Hare（Stanford University）
"The Particular Appeal of Children in Medieval Japan."

講師は、「能」の専門家である。能に出てくる「童子」の役割について、種々の角度から論じていた。

3月22日　学部スタッフ・大学院生とのフェアウェルパーティー。

3月23日　Taigen Dan Leighton師（Graduate Theological Union 講師）の博士論文審査委員会の相談役となる。

3月26日　サンフランシスコ国際空港より、NH007便にて帰国の途に。

3月27日　東京国際空港（成田）帰着。

各種教育研究活動に関する報告

以上に示した一年間の滞在期間中の活動は、①教育活動への参加（スタンフォード大学の講義への参加、セミナーの開催）。②研究活動（ワークショップ・シンポジウムへの出席。研究発表）。③海外開教の現場への参加（学外の禅宗寺院や禅センターにおける、現地の禅受容の形態の視察）に分類できる。

本章ではそれらのうち、教育・研究に関する活動について、特徴や傾向についての感想を含めて、その内容を詳述することにする。

なお、海外開教活動への参加については、概要は前章を参照いただくことにし、詳細は、稿を改めて報告したいと考えている。

仏教教育について

第一の目的である、アメリカにおける仏教教育についてであるが、これについては、主に前記の２教授の学部・大学院の講義とプロゼミに参加させていただいた。

Carl Bielefeldt, Zen Buddhism （春学期、月・水・金曜13:15〜14:05）

この科目は、毎年春学期に人文系の一般教養の必修科目として開設されている。毎年人気は高いとのことで、2000年度も150名近くの学生が履修をしていた。

講義形態は3ヶ月間に50分の講義が週3回、都合25回で一科目となっている。

学部の講義ではあるが、「禅」について集中的に触れるものであるので、具体的なシラバスを示しておくことにする。

Part Ⅰ: THE ZEN RELIGION

(reference book: Suzuki Shunryu, *Zen Mind, Biginner's Mind*)

3/29 1. Course introduction

3/31 2. Zen in the West. (Sign un for sections)

4/3 3. Zen in Asia

4/5 4. Zen religious ideals（1）: Esoteric lineage.

4/7 5. Zen religious ideals（2）: Special knowledge.

4/10 6. Zen religious practice（1）: Meditation.

4/12 7. Zen religious practice（2）: Monasticism. (First essay assigned.)

Part Ⅱ: INTELLECTUAL SOURCES OF ZEN

(reference: H. Dumoulin, *Zen Buddhism: A History. Vol. 1*)

4/14 8. Early Indian religious thought: The ascetic movement.

4/17 9. Mahayana Buddhism（1）: The Buddha as savior and exemplar.

4/19 10. Mahayana Buddhism（2）: The Bodhisattva path.（First essay due, in class）

4/21 11. Mahayana Buddhism（3）: The metaphysics of emptiness.

4/24 12. Chinese religious thought（1）: Cosmology and philosophy.

4/26 13. Chinese religious thought（2）: Mencius and Chuang Tsu.

4/28 14. Chinese Buddhism: The third truth and the Buddha vehicle.（Second essay assigned.）

Part Ⅲ: ORIGINS OF ZEN DOCTRINE

(reference: Dumoulin, *Zen Buddhism* & P. Yampolsky, *The Platform Sutra*)

5/1 15. The rise of Zen.

5/3 16. The Sixth Patriarch.

5/5 17. The Platform Sutra（1）: Sudden awakening.（Second essay due, in class）

5/8 18. The Platform Sutra（2）: Sudden practice.

5/10 19. The sudden-gradual controversy.

5/12 20. Soteriological models of the sudden practice.

Part Ⅳ: THE DEVELOPMENT OF ZEN RELIGIOUS STYLE

(reference: Dumoulin, *Zen Buddhism*)

5/15 21. Patriarchal Zen.

5/17 22. Zen dialogue.

5/19 23. The koan.

5/22 24. Rinzai Zen.（Final essay assigned.）

5/24 25. Soto Zen.

5/26 （open date, reserved for makeup）

6/6 （Final essay due）

内容的には、極めてオーソドックスなもの。最後を「曹洞禅」で締めるというのは、いかにもサンフランシスコ禅センター出身のカール博士らしい締め括りであった。

期間と講義時間が短いため、かなり駆け足の内容となっていることは否めないが、その穴を、月に1度という、かなり短い間隔のレポートで補っているという印象である。

単位認定は、講義中の発言とそのレポート（計3回）によって行なわれる。学生にとっても、かなり厳しいスケジュールでの課題の提出が要求されているが、正直言って、私は教員として、それを読んで評価する作業の負担の方が懸念された。その意味で評価法に注目していたのだが、レポートの評価は、教員が行うのではなく、すべて大学院生のチューターに任されていた。教員は、ほぼ講義をするだけなのである。このようなシステムによって、頻繁な課題提出の要求と、その評価が可能となっていた。

日本の教育状況と比較すると、学生に勉強させるために、教員がオーバーワークとならないような状況が作り出されている印象であった。

但し、そのかわり教員の講義姿勢に対する評価も厳しく、学期末ごとに、学生に教員評価票が配布され、査定が行なわれていた。

Carl Bielefeldt, Japanese Buddhist Texts（春学期、月曜15:15〜18:00）

大学院のプロゼミ。『正法眼蔵』「山水経」の巻の解釈および英訳を行うものであった。参加学生は高い日本語能力を有しており、江戸以前の注釈書をも使用しながら内容解釈を行ない、それに基づいて語学的に厳密な英訳を試みていた。

学生たちは、ゼミだけでは理解するのが難しいと判断すると、すぐさま自主的な準備会を開催、丹念な資料調査を行なっていた。ただし、まだ『正法眼蔵』本文の引用箇所を原点にまで遡及して解釈するというところまでは至っておらず、辞書・辞典類を細かく引用するという形式である。

私は、出席している院生の依頼により、準備会に参加し指導を行なった。

Bernard Faure, Japanese Buddhist Seminar（秋学期、水曜12:15〜2:30）

このゼミは、日本仏教全般に関するものであった。形式は、各週に一冊ずつ課題図書が与えられ、当番に当たった学生が、その内容要約をしつつ、問題点

や改善点を指摘して、それに基づいて討論を行なうというもの。ただし、それだけでなく、その他の参加学生にも、毎週それらの内容を要約したペーパーの提出が義務づけられていた。

課題図書と、進行ペースは次のごとくである。

Week 1: Introduction

Week 2: Karen A. Smyers, *The Fox and the Jewel: Shared and Private Meaning in Contemporary Japanese Inari Worship*, University of Hawaii Press, 1999.

Week 3: Steven Heine, *Shifting Shape, Shaping Text: Philosophy and Folklore in the Fox Koan*, University of Hawaii Press, 1999.

Week 4: Helen J. Baroni, *Obaku Zen: The Emergence of the Third Sect of Zen in Tokugawa Japan*, University of Hawaii Press, 2000.

Week 5: Jacqueline I. Stone, *Original Enlightenment and the Transformation of Medieval Japanese Buddhism*, University of Hawaii Press, Kuroda Institute, 1999. (part 1)

Week 6: Stone, *Original Enlightenment*. (part 2)

Week 7: Brian D. Ruppert, *Jewel in the Ashes: Buddha Relics and Power in Early Medieval Japan*, Harvard University Asian Center, 2000. (part 1)

Week 8: Ruppert, *Jewel in the Ashes*. (part 2)

Week 9: Ryuichi Abe, *The Weaving of Mantra: Kukai and the Construction of Esoteric Buddhist Doctrine*, Colombia University Press, 1999. (part 1)

Week10: Abe, *The Weaving of Mantra*, (part 2)

第2週から第4週までの禅関係の書籍に関して、フォール教授から依頼され、当番となった学生の事前準備と、発表の補佐を行なった。

とにかく、毎週250頁以上の書籍の全体像を理解してゼミに望む必要があるため、英語ネイティブの学生にとっても、かなり厳しい内容であろうと思われる。正直言って私は、一週間の準備期間では、主要な引用と結論部分を読んで、なんとか論旨を理解してゼミに臨むのがやっとであった。

上記の書籍のうち、印象に残ったものは、Baroni, *Obaku Zen* と、Stone, *Original Enlightenment and the Transformation of Medieval Japanese*

Buddhism の2点であった。

前者は、黄檗禅の伝来から展開にかけて、多くの資料を網羅した歴史的概説書。これほどの数量の黄檗関係の論文資料を一冊にまとめた書籍は、管見では日本にも存在しないのではないかと思われる。教団の展開に関しての解釈は、幕府の宗教政策を過大に評価しすぎている印象であったが、黄檗関係資料のリファレンスとしては、極めて有用と思われる。

後者は、鎌倉新仏教の性格づけについて、日本の研究者の一般的解釈に疑義を投げかけたもの。天台本覚法門の修行無用論への反発から一行専修の確立という歴史的認識を退け、むしろそれらは、教理的には「本覚を母体」としつつ、旧仏教勢力の有していた国家仏教的要素（ヒエラルヒー）の打破を意図して成立したものと定義されているように思われる。

その他の書籍も、すべて最近2年以内に刊行されたものであったが、それらの全体的傾向として指摘できるのは、日本の「仏教」を性格づけるにあたって、国家・政治権力との関係、特に協調関係が強調される傾向にあるのではないかと感じた。これが、欧米研究者に共通の傾向であるかどうかははっきりしないが、少なくとも、日本仏教を日本の文化的伝統として捉えて行こうという意識がこのような解釈を生じさせているような印象を受けた。

Bernard Faure, Buddhist Studies Seminar; Asian Cosmologies（冬学期、火曜15:15〜17:30）

ベルナール・フォール教授の冬学期のプロゼミは、アジアの世界観との副題が付されているように、東アジアの宗教における世界観に的を絞ったものであった。各々の分野ごとに、参考論文が提示され、担当学生が発表、討論をするという形式は、日本と全く同様である。ただ次に見るように、それは極めて広汎に亙っている。

これは、受講生の専門分野が多岐に亙っていることにも由来しよう。但し、指導しているフォール教授自身は、現在の興味が密教的世界観にあるようで、常に曼荼羅に（特にそれは胎蔵界）を意識しつつ指導をしていた印象を受けた。

講義概要は以下のとおりである。なお、春学期のゼミは筆者の研究期間終了後の開催であり、実際には出席していない。

Part 1 (Winter)

1. Presentation
2. Cosmogonic narratives; Hindu Myths, Chinese, Japanese (Kojiki)
3. Indian cosmology.
4. Buddhist cosmology.
5. Sumeru cosmology: Borubudur.
6. Chinese cosmology.
7. Astral cosmology.
8. Tantric cosmology.
9. Mandalas
10. Man as microcosm.

Part 2 (Spring)

1. Mikkyo cosmology: Kakuban, Gorin kuji hishaku.
2. Tachikawa-ryu: Hokyosho
3. Kirigami
4. Edo synthesis: Sangai isshin ki

Bernard Faure, Religion in Japan

冬学期にもう一コマ予定されていた学部専門教育の講義は、「日本仏教」であった。イントロダクションでは、極めて興味深い内容が予定されていることが語られていた。しかし、初回10人いた受講生が、最終的に1名しか残らなかった。「難しそうな内容にすると学生が集まりにくい」とはフォール教授の弁。この学生気質は洋の東西を問わないようである。

結局この講義は、学期中にフォール氏の講演旅行が予定されていたこともあり、課題提出形式のものとなってしまった。

自身の教育・研究活動

続いて、自分自身の行った教育・研究活動について報告する。

教育については、以下の3つの教育期間において、学生の指導に当たった。

(1) サマーセミナーにて講義。(6月25日～30日)

花園大学の沖本学部長からの依頼により、ニューメキシコ州ヘメスに位置す

るボディーマンダ禅センター（Bodhi Manda Zen Center, 臨済宗）において開催されたサマーセミナーの第2週の講師を勤めた。

対象学生は、ニューメキシコ州立大学（UNM）の宗教科の学部生と大学院生、および花園大学宗教科の学部生である。講義内容は、臨済宗の禅センターであることを意識し、達摩から馬祖系の禅者を中心に、大慧宗杲までの思想的特徴を「渾名」を媒体として解説するというものとした。

全体タイトルおよび各回の小見出しは以下のとおりである。

「The Nicknames of Zen Priests and What They Suggest; Reading Zen-rinkujitsukon-mei shu（禅僧の渾名でたどる禅宗史）」

① Introduction, The Naming System of Zen Priests（禅僧の渾名の付け方）

② The Priests Who Established the Foundation of Zen Thought; Sudden Awakening and Original Pure Nature
（禅思想の礎を築いた人々—頓悟と自性清浄—）

③ The Priest Called General Merchandise Store and His Disciples; Establishing Zen Practice in Daily Life（雑貨屋とその弟子）

④ The "Honor Students" of Engo's Lineage; The Priests of Koan Zen
（圜悟門下の優等生たち—公案禅のあけぼの—）

講義は、英文原稿を作成しそれを読み進める形とした。しかし、意外だったのは、UNMの学生はもとより、禅センターの修業僧ですら、「臨済」「曹洞」という宗派に関する意識が皆無に近いことであった。それは、宗派を超えた禅の実践を意識するというよりも、むしろ、その分化を認識するまでの情報が得られていない印象である。

その意味では、上の講義内容は、学部生や修業者クラスには若干難解であったと反省している。

(2) スタンフォード大学における『永平広録』講読

先にも触れたが、スタンフォード大学においても、SCBSのReading Groupとして、秋学期および冬学期に『永平広録』を講読した。

宗教学科博士候補生（大学院博士課程）を対象に、毎週金曜日12:30～14:00と週一度の講義であったが、秋学期には8回、冬学期には6回の都合14回の講義で、広録巻1・第1上堂から第23上堂までを読み終えた。

具体的な進行方法は、鏡島元隆博士の春秋社版『道元禅師全集』および奥村正博師（北アメリカ開教センター所長）と太源・レイトン師（Taigen Dan Leighton, Graduate Theological Union非常勤講師）による『永平広録』の英訳（未公刊）を用い、引用公案の歴史的な受容形態を意識しつつ、その中で道元禅師の主張の位置づけを探る形式とした。

(3) 米国宗教大学院（Graduate Theological Union）における論文相談役

前出の太源・レイトン師は、バークレーに位置するGraduate Theological Union（GTU）において教鞭を取りながら、自身でも学位論文を執筆中である。帰国間際に彼の博士論文の審査委員会におけるConsultant（論文相談役）となるべく依頼を受け受諾した。よってこの作業は、現在も継続中である。

なお、彼の論文審査委員は以下の3名である。

Richard Payne, Dean of Institute of Buddhist Studies, Committee Chair
Judith Berling, GTU
Thomas Kasulis, Ohio State University, outside reader

研究発表

(1) 正伝の仏法（道元禅）と中国南宋時代の禅ー道元禅師が中国曹洞禅から受け継いだものー

The True Transmission of Buddha Dharma and Chinese Chan in the Southern Sung Dynasty（*DHARMA EYE*『法眼』No.8所収、Apri,2001）

(2) 道元禅師在世中の永平寺僧団と顕密仏教

Eihei-ji Monastery System in Dogen's time and Kenmitsu Buddhism; Reconcidering the Position of Dogen's Monastery in Kamakura New Budhist Movement（2001/3/2、SCBSにて口頭発表）

(1) は、曹洞宗北アメリカ開教センターの発行する機関誌『法眼』の道元禅師大遠忌特集号に掲載されたもの。(2) は、SCBS主催の発表会にて行った口頭発表である。後者は、現在、推敲を経た発表原稿をホームページ上において公開しており、今後、活字にて発表を予定している。

参加シンポジウム

「The Buddhist Experience: Facets of a Religion」(2000/4/29)

このシンポジウムは、スタンフォード大学の生涯学習プログラムと仏教研究センターがタイアップして開催したものである。会場は、学外のGreen Dragon Temple（蒼龍寺）。この寺院は、サンフランシスコ郊外サウサリートに位置し、Green Gulch Farm（グリーンガルチファーム）という無農薬農園を併設した禅センターである。センターの僧堂内において、次のようなスケジュールでシンポジウムが開催された。

日程（2000/4/29）

AM 8:00 Meditation（optional）
AM 9:00 Morning Session（part 1）AM 12:00 Discussion
PM 12:30 Lunch
PM 1:45 Afternoon Session
PM 4:30 Discussion / Concluding Remarks

発表者および発表題目

(1) Carl Bielefeldt（Stanford Univ.）: Buddhist Thought
プレゼンターの紹介と、この後の発表の導入となる、仏教に対する基本的理解を促す内容。同じ仏教で、現世を否定的に捉える見方と肯定する考え方（穢土と仏土）のあることを指摘し、問題提起をしていた。

(2) Gil Fransdal（Sati Zen Center）: Buddhist Practice
まず「拈華微笑」の話を取り上げ、言葉による教えよりも、自己の体験を重視すべきことを説明、その後、参加者と共に『延命十句観音経』を読誦していた。これは、坐禅だけでなく、その他の宗教的実践の重要性を示すためのものであったらしい。

(3) Max Moerman（Barnard Collage）: Buddhist Art
スライド使用。まず、中国からインドに遡る形で、仏像やストゥーパ、それと外輪のレリーフなどを示して、ブッダの象徴化の歴史を概観。後に、曼荼羅から阿弥陀へと移行しつつ、仏教芸術の対象となる「仏」達の存在を呈示していた。

(4) Hank Glassman : Buddhism and Family
仏教における「家族」をどのように捉えるのか、中世日本の資料から、「釈迦本事」（蹉過の兜率説法の話）と、目連の非母救済説話を取り上げ、仏教における家族供養の意識の存在を指摘しつつ、そしてそれが、インドから日本へと伝播した経緯から、米国の禅においても重視されるべきであることを主張していた。

(5) Anne Klein（Rice Univ.）: Buddhism and Culture
スライド使用。チベット仏教文化について解説。その後、各国文化の違いについて、主体的自己表現の方法の相違の面から捉えていたように思われる。

(6) Mark Gonnerman : Buddhism and Nature
仏教と自然。筆者が基礎知識を欠くため、主張を把握しきれなかった。

このシンポジウムは、インターネットにて参加者を募集したが、申込開始からわずか3時間足らずで、100人の募集枠が満員となるほどの人気であったという。驚くべき反響と言えよう。

これは、生涯学習プログラムと連動していたことも理由の一つであろう。事実、会の雰囲気は、シンポジウムというよりも、ある種、宗教的実践を行なう現場で行なわれた、仏教思想に関する教養講座という色彩の濃いものであった。それにしても、この反応には、アメリカ西海岸における東洋ブームを垣間見たという印象である。

ワークショップ（学内）

(1) 2001/3/6-12 "Texts, Tools, Rituals: *Reikiki* and the World of Medieval Religion（Shinto Seminar）"

SCBS主催のワークショップ。札幌大学助教授ファビオ・ランベーリ氏が中心となり、真言神道の思想と儀礼に関して『麗気記』を用いて学んでいこうというものであった。

ワークショップ（学外）

(1) 2000/9/10-2001/2/11 "Dharma Study Group: reading Shobogenzo Bussho（Buddha Nature）" led by Shohaku Okumura at Soko-ji（桑港寺）in San

Francisco

曹洞宗北アメリカ開教センター主催のワークショップ。開教センター所長の奥村正博師の指導の下、月に一度、一炷の坐禅の後、『正法眼蔵』「仏性」の巻の講義が行なわれる。参加者のほとんどがヨーロッパ系アメリカ人である。

(2) 2000/9/18-19 "The Rituals of Precept Transmission in Soto Zen" led by William Bodiford (UCLA) at Green Dragon Temple (蒼龍寺)

前出のシンポジウムの行なわれた蒼龍寺において、嗣法分限以上の僧侶のための勉強会が行なわれた。それがこのワークショップである。講師はUCLA准教授のウィリアム・ボディフォード博士。内容は戒律に関するものであった。初日のみの参加であったが、出家戒の歴史的展開についての詳説であった。2日目が切紙資料を使用しての曹洞宗独自の戒律観であっただけに、2日目に参加できなかったのは残念であった。

北アメリカでは、戒律に関する興味が非常に高い。これは、禅僧（出家者）のアイデンティティ、あるいはステイタスの確立の問題と大きく関わってくるためであろうと推測される。極めて興味深い傾向である。

(3) 2001/2/3-4 "正法眼蔵 現成公按 (Treasury of the True Dharma Eye, Manifestation of Reality)" with Shohaku Okumura at San Francisco Zen Center (City Center、発心寺)

サンフランシスコ市内に位置する禅センター（発心寺）に於いて開催された、『正法眼蔵』「現成公案」の巻に関するワークショップ。中心となっていたのは奥村正博氏である。カール博士とともに参加したが、私の論文「『正法眼蔵』「現成公案」の巻の主題について」(『駒澤大学佛教學部論集』28号、1997.10) を引用しつつ、新たな本分解釈を試みていただけたのは驚きでもあり、光栄なことであった。

その後のディスカッションの中では、現地の参禅者が、的確に「一方究尽」的理解、すなわち宗門の伝統的な本文把握の正当性を主張していた。奥村師は、かなりの頻度で、『正法眼蔵』の講読会を行なっている。北アメリカの参禅者が、坐禅の実践のみならず、その知的裏づけをも探求しようという姿勢を持っていることを痛感させられたワークショップであった。

以上、スタンフォード大学やシリコンバレー周辺の禅センターにおける仏教研究について、私の触れ得たところをご報告申し上げた。

わずか一年の滞在では、その全体像など理解すべくもないが、それでも、自分なりに、海外の研究者の、仏教・禅研究への取り組みの姿勢や、あるいは坐禅という実践活動へのモチベーションなどは、肌で感じることができたと自負している。

視察寺院・禅センター（曹洞宗系）

スタンフォードのあるシリコンバレー・ベイエリアには、数多くの仏教寺院が存在している。その中で、曹洞宗系のみではあるが、設備を参観し、行持に参加した寺院・禅センターについて若干の紹介を試みておくことにする。

桑港寺（SōKō-ji）・曹洞宗北アメリカ開教センター

1691 Laguna Street, San Francisco, CA 9411

(phone: 415-567-7686/FAX: 415-567-0200)

サンフランシスコ日本町に位置し、日系人のメンバーを中心としたコミュニティーの中核として機能している寺院である。現住は南原一貴師。寺院の性格から、盂蘭盆会などの仏教行持にとどまらず、ひな祭りや七五三、あるいは節分会などの日本の伝統行事を網羅的に行なっている。

1997年にこの桑港寺の中に移転してきた開教センターは、前述のワークショップの開催や各地区の攝心の指導など、アメリカ人に対しての布教教化活動を担っている。

現在の北アメリカの曹洞禅は、かなり多様化しているとのことである。それを調整して行くのがこのセンターの役割と思われるが、現所長奥村正博師以下、スタッフはわずか4名。いかにも手薄である印象を免れない。現に所員の方々はかなりのオーバーワークと見受けられた。

好人庵（Kōjn-an）

6140 Chabot Road, Oakland, CA 94618（phone: 510-653-1918）

1982年に開創。開山現住は北アメリカ開教総監の秋葉玄吾老師。閑静な住宅街の中のキリスト教会の隣に位置している。先にも紹介したが、本格的な坐禅堂を有し、毎週の坐禅会や、毎歳の攝心を行なっている。茶室もあり、茶道教

室も開催されている。

沿革や行事予定等については、ホームページに詳しい。

URLはhttp://www.pxr.com/kojin-an/

發心寺（Beginner's Mind Temple, City Center）

300 Page Street, San Francisco, CA 94102（phone: 415-863-3136）

蒼龍寺（Green Dragon Temple, Green Gulch Farm）

1601 Shoreline Highway, Sausalito, CA 94965（phone: 415-838-3134）

どちらも故鈴木俊隆老師によって開かれた、現地の参禅者のための禅センターである。発心寺の開創は1969年。サンフランシスコ市内に所在するため、シティーセンターとも呼ばれる。出家者と在家者の混在した、アメリカ独特の禅センターである。

蒼龍寺は、無農薬農場が併設され、その利潤で運営される禅センター。グリーンガルチファームとして知られる。境内には茶室やゲストルーム、食堂なども調い、前出のようなカンファレンスやシンポジウム、お茶会なども開催されている。禅の修業者のみならず、無農薬農法の研修生も多数滞在し、共同生活を送っている。

この他に、同系列の禅センターに禅心寺（Zen Mind Temple, Tasajara）がある。今回の研修では訪ねることができなかったが、人里離れた山谷の温泉地に建立されている。開創は1966年。安居期間中は極めて厳しい修行が行なわれているという。夏合は、リゾート地として一般に解放される。このセンターでは、独特の様式を持った精進料理が作られ、健康食品として世に知られているという。

これら3カ寺については、一括したホームページがあるので参照されたい。（URL, http://www.sfzc.org/index.html）

むすび

以上、在外研究期間中の活動について、思いつくままに報告してきたが、最後に、この滞在期間中に感じた私見を呈示することによって、この報告の結びとしたい。

まず、仏教研究について言えば、率直に研究レベルの高さに驚かされた。それは研究者のみならず、大学院生についても言えることであり、現在の日本の

研究状況をかなり的確に把握し、それに基づいて自身の研究を展開しているのである。これは、語学能力の高さにも由来するものであろう。

ただ、残念だったのは、思想的あるいは教理的研究とまともに向き合う学生が少なかったことである。禅に限らず仏教思想全般についても同様で、ほとんどの学生が仏教に対して歴史的あるいは民俗学的な方法論を用いて研究に取り組んでいるのである。これは、学位論文執筆という目的意識がそうさせるのかもしれない。

また、もちろん、全体的均一に高いレベルを達成出来ているわけではなさそうで、たとえばサマーセミナーで対応したUNMの学生などは、信頼度の低い英訳のみを用いて仏教と対峙していたし、またいくつかの学位論文の発表を聞いても、若干論旨に無理の目立つものも存在していたことは事実である。

このような様相は、現時点で、まだ北アメリカの仏教研究が完全には成熟しきっていないための地域的な落差と解釈できそうである。

さて、いまひとつの実践面についてであるが、これも、私の予想をはるかに超えるものであった。大学の内外で、かなり多くの人々が興味を持ち、坐禅経験を積んでいるのである。その端的な例が、前述したBCAS、すなわちスタンフォード大学のブディストコミュニティーの存在である。

渡米以前は、まさか北アメリカの、しかもシリコンバレーの中心を担う大学に、仏教に関心を持つ学生のサークルが存在していようとは考えも及ばなかった。しかし、歴としてそれは存在し、かつ機能しているのである。

これら、海のこちら側では予想だにしなかった研究・実践の両面の活動を見聞できたことは、今回の在外研究での大きな成果のひとつであったといえる。

しかし、未だ問題点も残されていると聞いた。それはアカデミズムとプラクティスとが、はっきり乖離してしまっているという現状である。これは北アメリカに限ったことではないかもしれない。むしろ純粋な学問的興味から仏教を研究するとすれば、そこに信仰を織り込むべきではないという考え方は当然成立する。しかし、それがあまりに隔たっていることにより、それぞれが勝手なひとり歩きをしてしまっているというのである。

その意味では、BCASは特異な存在なのかもしれない。しかしこれも、乖離した状況を結びつけようとする、一つの流れの現われと解釈することも可能であろう。現に、カール博士に代表されるような禅センターでの実践経験者によっても、両者を近づけようという動きが出てきているとも聞く。

このような状況を垣間見た中で、北アメリカの道元禅の受容形態を考えてみるとき、筆者は、そこに、現代の日本にはない、道元禅師の時代との一致点が存在するのではないかという思いが浮かんできたのである。

これは、『法眼』に掲載された拙稿においても少し触れたところであるが、北アメリカへの道元禅の流入という異文化の接触が、道元禅師が中国から日本へと「正伝の仏法」を伝えた当初の状況と類似した様相を呈しているのではないかということである。

すなわちそれは、仏教・禅が国家権力からも、また地域社会からも束縛されない自由な精神活動として、ある一定の方向性を持とうとしている時期の活力と葛藤の様相に他ならない。

もちろん、これがかなり乱暴な対比であることは、充分に認識している。しかし、そのような感覚を抱かせる要素がそこにあった。

とはいうものの、現在の北アメリカの道元禅は、きわめて統一性のない状態にある。それは、各地に展開した禅センターが、横のネットワークを重視せず、また、共通の組織的基盤を持たずに各々の師弟関係の中でのみ確立した方法論を主張したことによると言われている。

これをどのように統合し、曹洞宗侶としてのアイデンティティーを養っていくかということは、今後の大きな課題となってこよう。

いま、北アメリカ総監部では、海外における宗侶育成のための規定作りに取り組んでいる。じつに、北アメリカ全土に、僧侶育成の専門僧堂が一つも存在しないという驚くべき現状を鑑みたとき、道元禅の、「健全な」展開のためには、このシステム構築の作業が必須となることは確実である。その意味で、総監部および宗務本庁の御努力にエールを送りたい。

ともかく、諸方の御厚情により、極めて有意義な一年を過ごさせていただいた。唯一の心残りは、帰国後すぐにでも御挨拶に伺おうと考えていた鏡島元隆先生が2001年2月に遷化されたことである。

北米の地にて『永平広録』を講じることができたのも、鏡島先生の御指導あればこそ成しえたことであり、その学恩は報い難きものである。

その先生の御葬儀に参列すらできなかったこと、最後まで不肖の弟子であったと自悔の念に堪えない。本報告のタイトルに先生の著書を真似て、「その周辺」と付したのは、些かでも学恩を受けた者の報恩の証しとなればと思ってのことである。

先生の御冥福を心よりお祈り申し上げたい。

最後になったが、秋葉玄吾開教総監、奥村正博所長をはじめ、開教センターの方々には、北米の道元禅受容について、数々のご教示を頂戴した。

また、英語もろくにできない私を快く受け入れてくださったカール博士、そして研究環境の整備にご尽力いただいた学部スタッフの方々をはじめ、私の在外研究によってご負担をおかけした方々に再度謝意を表して結びとするものである。

＜付記＞

・中間報告用ホームページについて

研究経過については、中間報告のためのホームページを作成し、逐次公開してきた。

初回報告は、2000年4月2日。アメリカにおける最終中間報告は2001年3月25日。研究期間中、都合29回の報告を行っている。ホームページは、現在もスタンフォード大学仏教研究センターのオフィシャルホームページにリンクされており、研究期間中に発表した論文・研究発表の内容を資料として閲覧できる状態にある。

本報告において記述の不明確な部分など、ご参照いただければ幸いである。

URLは下記の通り。

http://homepage1.nifty.com/seijun/